

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

— 同性への性指向を持つ男性という視点から —

後藤 健一

序章

1 ゲイとは何か？

最近、性的マイノリティに注目が集まり、LGBTなどの言葉をよく耳にする機会が増え、異性愛が前提であった社会と性的マイノリティの間の隔たりが少しずつ狭まっていることを感じる。性的マイノリティはマジョリティに対置されるものであるが、LGBTというカテゴリーとしてとらえられることが多い。日本では多様性をめぐる差別・不平等の問題と人権保障に取り組む政策が発展してないとされ（岩淵，2021）、昨今の報道では首相秘書官の性的マイノリティに対する発言が多様性にそぐわないなどとして伝えられ、それに端を発した国会でのLGBT理解促進法の審議、あるいは同性婚の議論が取り上げられる¹⁾。同時に性的マイノリティに対する様々な分野での記述や研究も増えているが、それらはLGBTのカテゴリーに基づいたものであり、とりわけ男性についてはGBであるゲイやバイとして表象されることが多い。

筆者はケアの領域において対人援助に携わっており、ときどき性的マイノリティの人々とも関わる機会がある。その中で以前、男性の当事者と関わり、彼等の境遇について様々なことを聞く機会があった。彼等は自分自身について「複雑」や「ややこしい」とした上で、「自分は男性であり、ゲイというわけではない、ただ性指向が違うだけ」、「ゲイという規定は何かこれじゃない感がある、男は男だけどノンケ男（異性愛男性）とは違う」と話すことがあった。筆者はそれまで自分が関わっていた同性への性指向を持つ男性はゲイであると思っていたが、本人からすると実はそうではなく性指向が異なる普通の男性なのである。それでは「ゲイとは一体何か？」、筆者はそんな疑問を抱かざるを得なかった。

2 伝える側と伝えられる側の乖離

そもそもゲイと一般的に表象される人々も実に多様とされるが、一つのカテゴリーで強固に括ることによって、その内部の多様性を抹殺してしまうとされている（伊野，1997）。社会における多様性の言説は、LGBTをLGBTQへ、さらにLGBTQ+として多様性の幅を広

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

げている。性的マイノリティやLGBTなど社会に流通する言葉は、それをを用いる人によってラベリングされたものに過ぎないため、性的マイノリティを一つの集団にまとめてカテゴリーに入れ、その中にある多様性についてはあまり関心がないように思われる。

また、筆者の聞いた「複雑」、「ややこしい」などの言葉は何を意味しているのだろうか。「多様性」は当事者をより理解しようとするため、あらゆる場面で使われるが、本人からすればそれは「多様性」といよりはむしろ「複雑さ」なのではないだろうかと筆者は考えるようになった。LGBTQ+は出生時に割り当てられた性別、性自認、性指向の3つの組み合わせに関するマイノリティを主に指し、複雑な概念だと言われるが(石丸, 2022)、それが彼等の複雑さの原因であろうか。しかし、彼等は男性、シスジェンダーで性別、性自認、性指向ともに明確であり、その「複雑さ」とは異なっているように思われる。

このように、一般的に性的マイノリティについてLGBTあるいはLGBTQ+として表象して伝える側と、実際は「これじゃない」、「ゲイというわけではない」や「複雑」、「ややこしい」と話す伝えられる側の状況はかなり異なっている。この伝える側と伝えられる側との乖離は何故起きるのであろうか。そこには伝える側が伝えきれていない性的マイノリティの内側の人々の実際があり、男性で同性への性指向を持っている男性同性愛者はゲイ、両性愛者はバイというカテゴリーに当てはめられてしまい、それぞれの当事者が持つ複雑さがそこにまとめられていることが原因ではないだろうか。

3 同性への性指向を持つ男性という視点

現在、ケアの領域では、当事者を中心にした実践や研究は主流のものとなっている。ここでの当事者とは受身ではなく、支援者や専門家に対して抵抗することができ、自らの権利を主張できる自立した存在であり、相手と対等な相互関係を結べるような主体的存在であると考えられる。しかし、実際はすべての当事者が自らの権利を主張できるわけではなく(川, 2013)、また当事者性が一種の伝家の宝刀として、当事者という言葉を用いることで必要性や優先度が増すような向きもある(石原・下地, 2022)。また、当事者との関わりの中で当事者を当事者としてカテゴリー化することにより、カテゴリー概念の呪縛から逃れることはできず、一見価値中立的な語法の中に社会的集団全員が無意識に共有しているイデオロギーが潜み、当事者の言葉を受け止め解釈する時にバイアスがかかり、援助者の生き様や価値が照射されるとも言われる(西村, 2012)。いずれにしても、ケアの領域における支援者のみならず、当事者として伝えられる側の言葉や概念を用いるとき、伝える側にとって有利になる方法として利用されたり、イデオロギーや価値観が潜み、意図を含ませてしまったりする可能性がある。

以上の事から、本論は性的マイノリティの男性当事者をゲイやバイとして表象する伝える側からの既存のカテゴリーではなく、「自分は男性であり、ゲイというわけではない、ただ

性指向が違うだけ」という当事者の言葉に基づき「同性への性指向を持つ男性」という視点でとらえることにより、カテゴリー化から脱することを目指す。しかしながら、男性という言葉は、英訳で man だけでなく dude や guy などのように訳すことができ、アメリカでは男性 (dude) という用語は男性であることが確認されたジェンダー・クィア、女性から男性へのトランスセクシュアル、トランスマスキュリンな人々、女性から男性へのトランスジェンダーの人々を表現するために用いられるようになっており (Altman, 2013)、男性が必ずしもシスジェンダーや生物学的な意味だけではない事にも注意が必要である。

4 本論の目的と方法

本論は、「ゲイとは何か?」という疑問をもとに、歴史や文献を紐解きつつ、ゲイというマイノリティの一つの枠によって伝えられる同性への性指向を持つ男性のアンケート調査を通じて、その既存のカテゴリーに当てはまらない当事者に焦点を当てようとする。そして、ゲイとして表象する伝える側と、それから外れてしまう伝えられる側との間のズレについて明らかにしようとするものである。

性指向は目に見えないものであるため、社会的に理解されにくい。しかし、同性への性指向を持つ男性の複雑さを理解しようとすることは、性的マイノリティだけに留まらず、日本社会における当事者理解につながるものであり、意味があると考えられる。

なお、本論では同性への性指向を持つ男性という視点を持ちながら、歴史や背景について述べる際、これまでの記述や研究などで用いられてきた男性同性愛者、ゲイという用語を用いる。

第1章 歴史

「ゲイとは何か」という疑問に対して、同性への性指向を持つ男性をめぐる歴史について概観してみることにする。

1 同性愛をめぐる歴史のはじまり

太古の昔から世界中のいたるところに、感情的にも肉体的にも同性の相手と親密になりたいと感じる男女が存在し、それは紀元前 1700 年の「ギルガメッシュ叙事詩」の国王と荒武者エンキドゥの関係まで遡ることができる (Aldrich, 2006)。古代ギリシアでは、ホメロスの「イーリアス」、女流抒情詩人サッフォー、中国では霊公と寵臣・弥子瑕との友情、インドでは、叙事詩「マハーバーラタ」にも同性愛は描かれる。わが国でも江戸時代まで衆道というものが存在し、それらは男色物として描かれた。

ローマ帝国の時代に入るとキリスト教の台頭に連動して、342年に皇帝コンスタンティウ

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

ス2世により受身の同性愛を禁止する法律が制定された。中世に入ると人々の道徳基準は自然か不自然かで区別されることになり、同性愛はソドミー（不自然な性行為）の一部として扱われるようになり、13世紀には宗教裁判で裁かれるようになった。

同性愛（ホモセクシュアル）という言葉は諸説あるが、17世紀イギリスのジェームズ1世によって欽定訳聖書の作成時、聖職者たちが同性愛に結び付きそうなギリシア語の二つの用語について、「女々しい」と「男によってわが身を持ち崩す連中」と訳していたものを、20世紀になり二つをまとめて新たに同性愛と訳したと言われている（Bray, 1982）。ここまでの同性に対する恋愛は、良くも悪くも人間の営む一部の行為とみなされていたが、その後、同性愛は一時的な過ちから病気とみなされるようになる。

18世紀に産業革命が始まると宗教よりも資本主義が台頭し、同性愛は宗教から分離され、18世紀から19世紀に入ると同性愛の観念は大きく変化し、1895年のオスカーワイルド事件に象徴されるように、それまで一時の過ちと見られていた単なる行為ではなく、特殊な種類の人間として考えられるようになった。1882年にフランスのマニャンとシャルコーが同性愛者を性倒錯者と呼び、同性愛者は変質者と見られ、変態、異常とされ、そこから同性愛そのものや精神病、社会病が生み出され、同性愛者の誕生は、それにまつわる論争と排他性が生み出され、それが今日まで続くことになった（海野, 2005）。

フーコーは次のように述べている。

人々は取るに足らない倒錯を法的にますます断罪し、性的に不規則なものを精神病に結び付けた。

かつての男色家（ソドミット）は性懲りもない異端者でもあった。今や同性愛者は一つの種族なのである。19世紀の精神医学者が洗礼名を授けて分類したあれらの取るに足らぬ倒錯者たちもまた、そのような種族に他ならない。

（Foucault, 1976: pp. 47-56）

わが国でも、明治には西洋医学の導入が進み、同性愛は同性即ち男性と男性、女性と女性との間に生ずる処の一種不可思議なる性慾であり、同性間性慾（同性愛、顛倒性慾）である変態性慾として紹介されている（羽太, 1921）。変態性慾は、ドイツの性科学者エビングによる「変態性慾心理」が大正2年（1913年）に邦訳され、日本の性欲学を触発したといわれている（黒岩, 2005）。

2 ゲイコミュニティとゲイにまつわる歴史

18世紀には同性愛は密かに栄え、欧州の主要都市にはそれらの人々が集まる酒場やバーなどのコミュニティが形成されており、自らを同性愛者として意識する人が誕生したのは

19世紀末のアメリカやヨーロッパであるとされている（風間・河口，2010）。産業革命後、各国で工業化や都市化が進む中で、こうした人々がパブ、コーヒーハウス、公園、鉄道の駅、街頭などでお互いを発見し、親密な関係を持つようになった。当時の欧米社会には、同性に魅力を感じる人同士が密接な関係を築くことを可能にする条件が整いつつあったとされている（Adam, 1995）。

当時の状況について、アンソニー・スライドは次のように述べている。

1851年、ゲイの作曲家アイヴォー・ノヴェロが最後のミュージカル「ゲイズザワールド」を書いたとき、そのタイトルが同性愛の観客に向けたジョークであったことは疑いない。当時のゲイという言葉は、大多数のイギリス、アメリカ人の間では呑気、快活、陽気以上の意味はなかったが、ロンドンのゲイコミュニティは彼が何について語っているのか知っていた。（Slide, 2015: pp. 1-2）

19世紀には、同性愛者のコミュニティがすでに形成されていたが、自らをゲイと自認する人々も現れつつあった。

ゲイという言葉の誕生には諸説あるが、“good as you”の頭文字をとったとするものや、ストーンウォール以降の同性愛権利運動後に生まれたとするものがあるが、すでに16世紀にはフランスで使われており、精神分析の中で1920年代には自らをゲイと呼ぶ同性愛の患者がいたと言われている（Draganowski, 2003）。

18世紀から19世紀にかけて、同性への性指向を持つ男性は、ソドミーや性倒錯とされる社会下ですでに自らを同性愛者と認識し、ゲイと自認する人々やコミュニティが存在していた。しかし、欧米の主要都市における同性愛コミュニティの歴史は、ゲイのサブカルチャーが必ずしもアイデンティティの基盤としてそれらを採用するのではなく、家族や経済的なプレッシャーから、多くの同性愛者が異性と結婚し、その傍らで同性関係や性的出会いを持っていたとされている（Altman, 2013）。

3 ゲイアイデンティティの形成

ゲイ男性によるコミュニティが、アイデンティティの基盤となり、ゲイとしてのアイデンティティが徹底的に強化されたのはアメリカであった。アメリカでは、ストーンウォール事件の前まで大都市を除き、LGBTの人々は秘密の生活を送っていた。これに対し、ストーンウォール後の時代は、現在も続く社会変動の動きの先駆けとなり、LGBTの人々は社会的な繋がり、コミュニケーション・ネットワークを構築し、経済的・社会的な権力基盤を確立し、文化的な制度や伝統を生み出すコミュニティを手に入れた（Haldeman, 2007）。なかでもゲイの人々は、それまで犯罪者あるいは精神医学のカテゴリーとして規定されたホモセ

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

クシュアル（同性愛）からゲイという自己執行的なカテゴリーの一員として自らを自覚し直していくことを同性愛者の解放と呼び、その自覚によって築かれるゲイカテゴリーのメンバーシップをゲイアイデンティティとし（金田，2003），同性愛に対する抑圧からの解放を訴えていった。

アメリカではすでに50年代から60年代にかけてホモファイル運動が限定的に成功し、ストーンウォール後の70年代のゲイ解放運動と権利運動がより大きな影響を与える中で、ゲイ男性やレズビアンは社会規範に挑戦し、組織や制度を構築し、全米の都心で実質的かつ内部的に分化したサブカルチャーを確立していた。80年代にエイズの流行が認識され、健康危機が訪れるまでに、すでにアメリカのゲイコミュニティは10年分のコミュニティネットワークの構築が行われ、ゲイ運動は集団のアイデンティティの中に具体的な政治目標を構築し主張できるようになっていた。そのため、アメリカにおけるゲイ男性は社会財と社会的平均をめぐる闘争に関与するための重要な資源一式を備えてエイズの時代を迎え、エイズとの対決と関連によってアイデンティティが最も徹底的に形成された集団である（Epstein, 1996）。

アメリカではオバマ政権に至るまでの30年間国家的なエイズ政策は持たなかったため、ゲイコミュニティでは、医療や社会的支援のネットワークづくりが求められ、感染者とそのサポートネットワークを支援するためのコミュニティや慈善団体が立ち上がった。エイズによって壊滅的な打撃を受けたゲイ男性の世代は、個人としてもコミュニティとしても強くなったとされている（Halkitis, 2014）。この時期、すべての人が政治的に関与したわけではないが、多くの人が募金活動を手伝うなどボランティア活動を行った。また、エイズの出現によって、家族内パートナーシップ、病気や死期の迫ったパートナーとの接触、相続といった家族政策がゲイ男性にとって重要なものとなった（Cruikshank, 1992）。

多くのゲイにとってホモセクシャルが臨床診断のように聞こえるなら、多くの異性愛者にとってゲイは政治的主張のように聞こえると言われ（Bawer, 1993），アメリカのゲイコミュニティは国家に対する政治動員という文脈を抱えながら、健康問題に対するケアや家族という側面を持ちつつ進化してきた。その後、ゲイ運動では、多文化主義、フェミニズム運動、公民権運動などの分野と並び、アイデンティティ・ポリティクスという用語が広く用いられるようになり（Bernstein, 2005），アイデンティティへの関心が浸透していった。

4 歴史からの考察

歴史の流れを辿ると、人々の間にあった同性愛が、宗教や近代社会の中で犯罪や性倒錯として扱われ、同性への性指向を持つ男性は、産業革命後は犯罪者や精神病者とみなされるようになる。しかし、彼らの中にコミュニティが誕生、同時にゲイを自認する人々が現れ、彼らが時代とともにゲイコミュニティを築き、ゲイコミュニティが彼らのアイデンティティの

基盤となり発展、ゲイ解放や権利運動を経て多くの人が自らをゲイとして認識していった。

また、ゲイは単に個人を表すだけでなく、ゲイコミュニティやゲイアイデンティティと密接に関係するものである。そのため、ゲイというものが自然発生的に作られたというより、ソドミーや異性愛社会からの解放、エイズ流行下での抵抗といった歴史の中でコミュニティやアイデンティティと共に築き上げられた一つ概念であると考えられる。

第2章 概念の広まり

歴史的にゲイとは、ただ単に同性への性指向を持つ男性を表象する言葉だけでなく、ゲイコミュニティを基盤にしたゲイアイデンティティと深く関係した概念である。以下、ゲイという概念を改めて整理したうえで、日本においてこの概念が広まっていった経緯を確認し、それにまつわる研究や記述について紐解くことにする。

1 ゲイという概念

辞典によれば、ゲイは陽気な・男子同性愛者とされている(いけだ, 2014)。そしてゲイは「主な感情的、色情的、関係的な好みは同性(ホモフィリック)であり、自己表示の一部がこれら同性への愛着を認めている男性」と定義されている(Fassinger & Arseneau, 2007)。同時にゲイは実際のパートナー(実際又は想像上の)選択の性別を意味しており、他者との関係性の中で現れる概念であり、そういう意味からもコミュニティは重要である。また、自らをゲイとして自覚するのは、ゲイアイデンティティを備えているからであり、ゲイアイデンティティは同性愛者の存在が顕在化し、独自のゲイアイデンティティを備えるに至ったものとされる(山中・成田, 1992)。

ゲイコミュニティの基準はテリトリーと連帯と集団行動とされる(Murray, 1996)。テリトリーの概念はゲイ男性とその家族に重要な安全感の鍵となり、連帯や集団行動は喜びやエネルギーを生み出す可能性がある点で重要であり、このようなゲイコミュニティは「村」と表現され、法律的にも生物学的にも関係のない人々で構成されるにもかかわらず、連帯感を高める要因は共通の価値観があるからだとされる(Haldeman, 2007)。

ゲイという概念は、ゲイコミュニティとゲイアイデンティティと関連しており、連帯や集団行動、安全を共通の価値とするゲイコミュニティに基盤を置き、ゲイコミュニティの一員としてのゲイアイデンティティを持つ男性である。

2 日本におけるゲイ概念の広がり

日本では、明治に入り男色などの文化は非文明的なものとされ、明治6年施行の改定律例266条により、同性間の性行為は鶏姦罪として規定され、戸籍の導入により性別は男性と女

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

性に分けられ、同性愛と言う医学的概念が日本で一般化する数十年前に、その論理が依存する性二分法に向けて国民の身体に手入がされた（Pflugfelder, 2012）。エビングの「変態性欲心理」が邦訳された大正期には、変態性欲としての同性愛の概念は普及し、性欲学が流行した（古川, 1993）。大正11年には、雑誌「変態性欲」が出版され、その中に同性愛読者からの投稿が公開されており（竹内, 2007）、男性同性愛者たちの様々な悩みや苦しみの投稿は、男性同性愛者たちの語りの場であり、わが国で初めての空間とされている（前川, 2010）。

戦後、1950年代になると、男性同性愛者を接客するバーが営業をはじめ、60年代の高度成長期には公共空間におけるハッテン場²⁾も増え、1971年に創刊されたゲイ雑誌「薔薇族」³⁾は一般の書店で販売され、当時の同性愛者には情報革命とされる。また70年代後半には、ラジオの深夜番組でアーティストがゲイと公言したのをきっかけに多くの人に影響を及ぼし、アメリカのゲイ解放運動の影響を受けたグループが出現し（風間・河口, 2010）、この頃からゲイという用語が顕在化している。しかし、同性への性指向を公言しにくい状況は変わらず、1973年の富士高校放火事件や1983年の宮崎雑誌万引事件、1990年府中青年の家事件、2000年に新木場の都立夢の島公園でゲイ男性が殴り殺された事件、いわゆる「ホモ狩り」があった⁴⁾。

このように日本では、アメリカの解放運動の影響はあったものの、ベースにはゲイバーやゲイ向け雑誌など商業サービスを中心に同性への性指向を持つ男性が集う場が作られ、ゲイを自認する男性が増えていった。

1980年代にエイズが日本に入ると、1985年3月に厚生省エイズ調査検討委員会が日本に一時帰国したアメリカ在住の日本人同性愛男性をエイズ患者第1号と発表した⁵⁾。1989年にはエイズ予防法が施行され、厚生省HIV感染症疫学研究班は同性愛当事者と協働し、疫学研究室、ゲイCBO⁶⁾、行政の3者によりMSM（Men who have sex with man）⁷⁾を対象にHIV感染予防に向けた啓発介入が行われた（市川, 2003）。1999年には厚生労働省により「エイズ予防指針」⁸⁾が策定され、そのなかの個別政策層の中に「同性愛者」が定められた。

国家による同性愛者としての主体の承認は、同性への性指向を持つ男性を取り巻く環境を大きく変化させ、2000年に入ると、東京レズビアン&ゲイ・パレードが開催され、約2000人が参加、同日、新宿では東京レインボー祭りが開催された⁹⁾。この日はゲイコミュニティが誕生した日とされている（伏見, 2004）。エイズ政策の中で、ゲイコミュニティをめぐる言説やイベントは男性同性愛者の間でも徐々に流通し、日本の同性愛者という主体は、国による承認を経て、質、量ともにその活動の範囲を拡大させていったとされている（新ヶ江, 2013）。

3 先行研究

わが国におけるゲイ概念の広がりを示す研究や記述をあげてみる。

風間 (2010) は、戦前の雑誌「変態性慾」について、読者投稿の中に性指向や結婚に関わる苦悩などの投稿が見られ、ゲイコミュニティの萌芽とも呼べる状況が一時的に出現したとしている。そして、伏見 (2004) は、終戦後、10年でゲイバー、ゲイ雑誌、ハッテン場というゲイの主要アイテムが揃ったとしている。

布施 (1959) は、同性愛者が同性愛のみを主訴として医師を訪れることはほとんどなく、それは若干の荷責を覚えながらも、倒錯行為を享樂し、グループを形成して、その中で自分たちは治らないものだと思わされているからだとしている。また、別府・杉本 (1959) は、性欲倒錯症の一例として、患者から、最近上野新宿等のゲイボーイを買っていたという供述を得たとしている。これらの医師による当時の倒錯行為の享樂、グループの形成、ゲイボーイなどの記述は伏見の記述と一致するものであるが、当時の医師の記述は同性への性指向を持つ男性のことを同性愛者、性倒錯症例としており、伏見の記述はあくまで後の時代から同性への性指向を持つ男性をゲイに当てはめたものであり、この後のゲイ・スタディーズが影響している。

ゲイという概念は70年代から日本国内で広がりはじめていたが、Vincent・河口・風間 (1997) は著書「ゲイ・スタディーズ」において、デニス・アルトマンの「同性愛—抑圧と解放」(Altman, 1971) がゲイ男性による理論で最も先駆的な研究とし、異性愛至上主義社会に対する抵抗運動を紹介しつつ、同性愛の学問的研究が国際的に認知されているとしている。そして、ゲイ・スタディーズは自らを同性愛者と認識している同性愛者による同性愛者に関する研究であるとしながらも、日本では同性愛者が同性愛について知っている訳でなく、マスコミによるゲイブームにより同性愛が商品化され、ゲイアイデンティティが確立されていないとしている。

金田 (2003) は、社会学においてセクシュアリティ研究あるいはレズビアン／ゲイ・スタディーズという形で、セクシュアリティに関わる問題が主題化されるようになってから日本ではそれほど時は経過しておらず、「ゲイ・スタディーズ」において、はじめて日本でゲイ・スタディーズという言葉が、研究者間において独自の研究領域として認知されるようになったとしている。

杉山 (2012) は、同性愛者のインタビューについて、ゲイ・スタディーズの立場からゲイとして様々な当事者から聞き取りを行ったとし、研究対象を同性愛者としながら、表題の英訳ではゲイとレズビアンと訳している。

河口・風間 (2010) は「同性愛と異性愛」のなかで、同性愛の問題を同性愛者の中だけで考えるのではなく、異性愛者の人々と関連づけて社会に広く問いかけたいとしている。そして、男性同性愛者という言葉を用いつつ、男性同性愛者を指す言葉としてゲイも用いているとしており、男性同性愛者とゲイが混在する形となっている。

80年代から、日本でエイズの流行がはじまると、同性への性指向を持つ男性をめぐる研

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

究用語は変化する。新ヶ江（2013）は、80年代から90年代までの疫学研究の中で、同性への性指向を持つ男性の個人や集団をめぐる様々なカテゴリーの変遷について整理し、それまでの男性同性愛者やホモセクシュアル男性という呼び方のなかにゲイやMSMが加わり、集団に対する呼び方がエイズのリスクグループからゲイコミュニティへ変わっていったとしている。

疫学研究では個人よりもコミュニティの動員を目的とするようになり、鬼塚（2004）は、ゲイコミュニティの予防事業は国の予算に財政基盤を置く協働プロジェクトの形で執行されたとし、市川（2007）は、商業施設で働く人々をコミュニティのキーパーソンと位置づけ、それらの人々と連携することは予防啓発活動を推進していくうえで重要とし、当事者の参加の下、コミュニティへの働きかけを行っていった。市川は、ゲイコミュニティという言葉から男性同性愛者の生活共同体（地域）が存在するかのような連想を持つが、わが国にはそのような意味でのゲイコミュニティは見当たらず、男性同性愛者同士が集い、語らう場としてはバー、クラブなどの商業施設、あるいはサークルやインターネットなどが利用され、これらの場を通じて情報交換や交流が行われており、これらの場をゲイコミュニティとしてとらえるとしている。

日高（2008）は、エイズウイルス感染リスク行動の心理・社会的要因に関する行動疫学的研究において、対象をMSMおよびゲイ・バイセクシュアル男性（以下、ゲイ男性）とし、MSMとゲイ男性を並べて標記し、混在させる形となっている。

エイズ流行以降、同性への性指向を持つ男性に対する研究や記述はほぼ同性愛男性などととともにゲイと併記されるか、ゲイとするものが主流となっている。

三部（2010）は、キャス・ウェストンの「選び取る家族」（Weston, 1991）をもとに、同性の恋人同士が親密な関係性を継続させてゆく中で、日本のゲイコミュニティが悩みを共有できる「かぞく」と呼ばれる新たな関係性を開く芽を確認できたとしているが、アメリカの背景とは異なり、ゲイコミュニティはアイデンティティ形成・維持やパートナー探し、友達探しの場にとどまっているとしている。

宮腰（2012）は、同性愛者がセクシャリティを受け入れるプロセスを検討しているが、研究協力者をゲイ男性としている。

森山（2012）は、ゲイコミュニティにおけるゲイ男性の心理的距離や疎外感である「ついていけなさ」を指摘し、ゲイコミュニティという語はその理想主義的な傾向により、ゲイ男性の集合性における個々のゲイ男性の「ついていけなさ」を見えにくくさせているとしている。

平田（2013）は、中年期・老年期のMSMについて、集団として言及する場合はMSM、個別の人物に言及する場合はゲイ（バイセクシュアル）を用いるとし、心理的課題としてコミュニティとの接触のなさやコミュニティ成員の体験の継承性を課題として挙げている。

加藤 (2015) は、アメリカにおける男性同性愛高齢者の特徴と社会サービスの提供に関する研究の中で、対象を LGBT 高齢者の中の特に男性同性愛者としている。

砂川 (2015) は、文化人類学から、新宿二丁目というゲイ男性が集まる都市がコミュニティ化される過程をフィールド研究し、パートナーシップを見つけ認められるバーや盛り場という都市的構造としての社会的空間があるだけでなく、ゲイの抵抗的实践、セクシャリティが共有できるコモنزという連帯意識や介在関係が、物理的な条件を前提にしながらも土台となっているとしている。

林 (2017) は、カミングアウトに関する質的研究において、対象者を男性同性愛者とし、性指向の自己受容はコミュニティの影響により高まるとしている。

田中 (2017) は、セクシュアルアイデンティティに関する心理的課題について検討し、その中で、ジェンダーアイデンティティと同じセクシャリティに向く男性をゲイとしながら、セクシュアルマイノリティと同義に用いられることの多い LGBT の概念の頭文字に用いられるほど代表的な性指向に関するマイノリティとして知られているとし、LGBT を研究対象としている。

玉城 (2021) は、男性同性愛者の身体の客体化について論じているが、同性愛男性という用語を使用することが多いとしながらも、ゲイ男性やゲイといった用語を互換的に使用しているとしている。

田中・今城 (2021) は、LGBT はセクシュアルマイノリティを包括して表す言葉とし、自己受容とカミングアウトの関連性を検討しているが、106 名の対象者の中に、LGB は 66 名いたが、残りの 36 名の中には分からない、回答したくないという人がいたとしており、性的マイノリティが LGBT というカテゴリーでは包括しきれないことを見ることができる。

田中・西山 (2022) は異性愛を中心とする社会において、一般的に同 (両) 性愛者は LGB と呼ばれるマイノリティとされるとしている。

4 概念と文献を通じた考察

ゲイ概念の広がりや文献について検討すると、研究者ごとにゲイの扱いが異なることと、日本におけるゲイの意味がアメリカと異なることが見えてくる。まず、海外からのゲイという概念の流入により、研究対象者が男性同性愛者からゲイ男性へと変化してきており、これにはゲイ・スタディーズの影響が大きいと考えられる。それに加え、エイズの流行を経て疫学研究でゲイコミュニティに焦点が当てられたことにより、ゲイというカテゴリーが広がる中で、性的マイノリティは LGBT であり、同性愛男性はゲイとしてとらえられるようになっている。さらに、研究者の立ち位置によっても同性への性指向を持つ男性の記述が変化し、ゲイ・スタディーズのようにゲイという立場でゲイを研究対象にする場合はあくまで研究対象はゲイであり、疫学研究などの性行為に焦点を当てる場合には MSM が多く、そうでない

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

場合では同性愛男性やゲイが両方用いられることもあり、同性への性指向を持つ男性に対して用いる用語とその用法は研究者により様々である。

次に、ゲイ概念の流入はアメリカの影響が大きい、アメリカと日本では意味に違いがある。アメリカでは、ゲイ解放は新しいコミュニティを発展させることであるとされるように(Altman, 1971)、政治動員やケア・家族という文脈や側面を持つゲイコミュニティとの間に深いつながりを持ち、個人が必要を感じて「村」と表現されるゲイコミュニティと関わり、個人のレベルからゲイコミュニティが強化され、ゲイとしてのアイデンティティが形成され、ゲイという用語はゲイコミュニティやゲイアイデンティティによって裏打ちされている。一方、日本では商業ベースの集いの場が生まれ、その後、ゲイ解放や権利運動よりも先にゲイ・スタディーズが入り、エイズ対策の中で国家主導の公衆衛生施策により、これらの集いの場をゲイコミュニティとすることで、同性への性指向を持つ男性の中にゲイコミュニティが流通し、そこに関わる男性は自らをゲイと自認するかしないかに関わらずゲイと表象されるようになっていく。また、コミュニティとの接触のなさやついていけなさ、会員同士の継承性が課題にされる一方、コミュニティが自己受容を高めるとされており、日本の場合、ゲイという概念が人々の間から生まれたというよりもむしろ輸入された概念であり、その概念に対して政治動員やケア・家族という側面を持つ連帯と集団行動、安全という価値よりも、商業をベースにした側面を持ちながらパートナー・友達探し、セクシャリティの共有といった個人の性的実践に価値を置く傾向が強く、ゲイという概念が本来の意味としてのゲイではなく、ゲイという用語として広まっているように思われる。

第3章 同性への性指向を持つ男性の声

「ゲイとは何か？」という疑問に対して、歴史や文献を紐解いてきた。同性への性指向を持つ男性をゲイとして伝える側と、「ゲイという訳ではない」と話す伝えられる側との間に生まれる乖離は、ゲイという言葉が海外で形成されたゲイコミュニティやゲイアイデンティティに裏打ちされた概念というより、同性への性指向を持つ男性を表象する用語として用いられているから起きるのではないかと考えられる。

それではここで、同性への性指向を持つ男性自身はゲイというものに対して、実際どう考えているのであろうか。

1 問題と目的

同性への性指向を持つ男性はゲイについて、どう考えているのであろうか。彼等が自らをゲイと認識しているのか、ゲイコミュニティに対してどのように考え、コミュニティにゲイとしてのアイデンティティを持っているのか、彼らの実際の声を聞くことにする。

2 調査の概要

同性への性指向を持つ男性 35 名にコミュニティとの関係性を問う調査（表 1）を実施した。調査はあらかじめ決められた項目を回答するアンケート形式で、15 項目からなり、選択式が 14 項目（質問 13 を除く）、記述式が 1 項目（質問 13）となっている。

内容は、年齢や住まいに関する基本的な質問（質問 2, 3）、自分に対する認識を問う質問（質問 1, 4）、コミュニティとの関係を聞く質問（質問 5, 6, 8, 9, 13）、日常生活に関する質問（質問 7, 10~12, 14, 15）となっており、この中から本論に関係するものとして、質問 1, 5, 13 を取り上げることにする。

なお、当該調査は、2023 年 6 月 14 日に東京経済大学コミュニケーション学部・大学院コミュニケーション学研究科調査・実験等研究倫理小委員会へ倫理審査申請を行い、6 月 17 日付けで承認されている（承認番号 2023-01）。

また、調査はゲイコミュニティとされるゲイバーなどの場所やイベント会場ではなく、日常や普段の生活の場での調査であり、同性への性指向を持つ男性当事者数名からの紹介によりネットを介してスノーボール式で集めた。

3 結果

選択式 14 項目の回答率は 100% であり、記述式 1 項目の回答率は 35 名中 14 名で 40%、アンケート全体の回答率は 99.3% であった。

まず、年齢や住まいに関する基本的な質問（質問 2, 3）から、年齢層は 10 代から 90 代のうち、20 代 8 名、30 代 10 名、40 代 6 名、50 代 10 名、60 代 1 名であり、20 代から 50 代が中心であった。住まいは、都区内 11 名と都区内以外の首都圏 4 名、地方 20 名であり、都市圏と地方ともにほぼ同数であり、住まいも年齢も様々であった。

自分に対する認識を問う質問のうち、「自分に最も当てはまるものを選ぶとしたら？」（質問 1）では、「男」、「ゲイ」、「バイ」、「トランス」、「クイア」などの項目を提示したところ、「ゲイ」23 名、「男」6 名、「バイ」3 名、「トランス」0 名、「クイア」0 名、「MSM」2 名、「SSA」¹⁰⁾ 1 名であった。全体の 7 割が「ゲイ」や「バイ」と回答していたが、「男」と回答した人も 2 割あった。

コミュニティとの関係を聞く質問のうち、ゲイコミュニティに対する考えを問う質問「ゲイコミュニティに対するイメージは？」（質問 5）では、「良い」と回答した人が 5 名、「自分に近い」と回答した人が 3 名、「自分と同じ」と回答した人が 2 名で、「何とも思わない」人が最も多く 19 名、「悪い」と回答した人が 1 名、「自分と異なる」と回答した人は 5 名であった。

コミュニティに対する記述式の質問「自分にとってコミュニティとの関わりの中で得られたことやそこでの経験などがあればお聞かせ下さい」（質問 13）では、回答した人が 13 名、

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

未回答が21名、「特になし」と回答した人が1名いた。13名の回答を共通点でまとめると以下の通り、(1)「人脈と情報源」、(2)「心の拠り所」、(3)「性的な充足」となった。なお内容は原文のまま表記した。

(1) 人脈と情報源

- ・「幅広い人間関係」
- ・「普段生活している中ではまず合わないであろう職業の人と懇意になれて、有意義な情報をえられる事」
- ・「人脈」
- ・「普通に交わる事のない異なる分野の人との関係が持てること」

(2) 心の拠り所

- ・「1人じゃないと思えた事」
- ・「通常生活に比べるとやはり生きにくい世界なので、狭い檻の中で同じ気持ちを思った人と交流をしていく自分を大事にすることができたと思います」
- ・「年を重ねるとなかなか友人は出来にくいですが、なんでも話せる友人がSNSでできたこと」
- ・「自分の性思考は世の中では恥ずかしいもので隠さなければいけないものだと思っていたが、同じ性思考を持つ人と関わったおかげで自信を持つことができた」
- ・「同じ趣味の仲間に出会えた」
- ・「自己肯定感が高まった」
- ・「孤独感から解放された」
- ・「同性愛の人が以外にも身近にいることを感じられること」

(3) 性的充足

- ・「SEX」

4 調査に対する考察

調査では、「ゲイとは何か？」という疑問に基づき、同性への性指向を持つ男性が自らをゲイと認識しているのか、ゲイコミュニティに対してどのように考え、コミュニティにゲイとしてのアイデンティティを持っているのか確認した。

多くが「ゲイ」あるいは「バイ」などのカテゴリーに当てはめていたが、「男」と回答した人も少なくなかった。筆者が今まで関わった当事者からも、「ゲイという規定は何かこれじゃない感がある、男は男だけドノンケ男（異性愛男性）とは違う生き物だという自覚あるしなあ…」、「自分は男性であり、ゲイというわけではない、ただ性指向が違うだけ」という言葉を聞いたことをすでに述べたが、それと一致するものであり、同性への性指向を持つ男性がすべてゲイとしているわけではなかった。また、ゲイコミュニティに対して、「何とも思わない」と回答した人が最も多く19名であったが、「良い」、「自分に近い」、「自分と同

じ」など肯定的な回答をしている人が10名、「悪い」、「自分と異なる」などの否定的な回答をしている人が6名あり、すべての人がゲイコミュニティに肯定的なイメージを持っているという訳ではない。

そしてコミュニティとの関わりに関する質問は、人脈や情報源としての役割や心の拠り所などコミュニティとの関りにおける個人的な経験に対する回答であったが、「1人じゃないと思えた事」、「人脈」、「同じ趣味の仲間に出会えた」といった連帯や集団行動をイメージする回答もあった。一方で、「幅広い人間関係」、「同じ性思考を持つ人と関わったおかげで自信を持つことができた」、「SEX」などパートナー・友達探し、セクシャリティの共有といった個人の性的実践をイメージする回答もあったが、「1人じゃないと思えた事」や「幅広い人間関係」は、連帯や集団行動と同時にパートナー・友達探し、セクシャリティの共有のどちらもイメージすることができる。いずれにせよコミュニティに連帯と集団行動という価値を持つ人がいながらも、個人の実践に価値を置いている人もいると考えられ、すべての同性への性指向を持つ男性がコミュニティにゲイとしてのアイデンティティの基盤を置いているとは言い切れないと思われる。

以上のことから、ゲイと表象されている同性への性指向を持つ男性がすべて自らをゲイと認識しているとは言えず、またゲイコミュニティに対しても肯定的イメージだけではなく、それぞれの価値に基づくアイデンティティを持っているように考えられ、彼等がすべて本来のゲイという概念に当てはまるとは言えないのではないだろうか。

第4章 まとめ

本論は、「ゲイとは何か?」という疑問について、ゲイとして伝える側とゲイではないという伝えられる側の乖離が何故生まれるのか調べるため、ゲイというカテゴリーにとらわれない同性への性指向を持つ男性という視点で歴史や文献を紐解いたうえで、彼らの声を聞いた。

1 同性への性指向を持つ男性という視点から見たゲイ概念

歴史から、ゲイは単に個人を表すだけでなく、ゲイコミュニティやゲイアイデンティティと密接に関係する概念であった。また文献からは、日本の場合、ゲイは輸入された概念であり、すべての同性への性指向を持つ男性が自らをゲイと自認し、ゲイコミュニティにつながり、ゲイアイデンティティを持っているとは限らず、概念というより用語として広く流通していることが推測された。

そして実際、同性への性指向を持つ男性への調査から、ゲイと認識する人も多かったが、筆者が当事者から聞いた「自分は男性であり、ゲイというわけではない」の言葉どおり、自

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

らをゲイというよりも男性として認識している人もいた。また、多くの同性への性指向を持つ男性がゲイコミュニティに対して「何とも思わない」という人が大半であったものの、すべての人がコミュニティに対して肯定的なイメージを持っている訳ではなかった。そして、その人なりにコミュニティに価値を感じながらそれを利用しているが、すべての人がコミュニティに連帯や集団行動を価値とするアイデンティティだけを見出しているとはいえず、ゲイという概念がすべからく本来の意味として日本に根付いているとは言い難い。

2 伝える側と伝えられる側との乖離

同性への性指向を持つ男性について、伝える側と伝えられる側との乖離は、同じ境遇の人が同じゲイやバイなどのカテゴリーに入れられてしまい、そのカテゴリーが前提となり、ゲイと表象されていることが原因である。そのカテゴリーは、ゲイコミュニティやゲイアイデンティティと密接に関連したゲイという概念に裏打ちされたカテゴリーではなく、ゲイという用語によって表象されているに過ぎないものであると思われる。これには、ゲイコミュニティが異性愛社会からの解放やエイズ流行への協力という当事者の中から発生したものではなく、もともとあった商業施設等を公衆衛生施策の中でゲイコミュニティとしてきた経緯があり、すべての人がゲイコミュニティに対して連帯や集団行動といった価値を基にしたアイデンティティを持っているわけではなく、相手探しやセクシャリティの共有という個人の性的実践としての価値を見出す場合もあり、アイデンティティと関係性の連関のなさ（森山、2012）も背景にあるのではないかと考えられる。

また、同性への性指向を持つ男性はゲイという前提が作られることで、彼らのなかには異性愛前提社会という前提とは別に、ゲイという2つの前提の中に置かれている人がいる可能性もあり、そこに複雑さや、ややこしさを感じるのかもしれない。

3 ゲイという前提

本論では「ゲイとは何か？」という問題を提起したが、Vincent・河口・風間は、「ゲイ・スタディーズ」の中で次のように述べている。

ゲイとは何かという問いに対して、私たちは答える必要がない。むしろそういう問いに対して抵抗し続けることが大事だ。その抵抗こそ、ゲイのアイデンティティが見え隠れしながら生まれてくるであろう（Vincent・河口・風間、1997: p.116）。

この言葉はアイデンティティのイデオロギー化に対する抵抗と、異性愛社会に対する抵抗という二つの意味が含まれている。また、ゲイアイデンティティをアメリカとは異なる日本の風土に根付かせようとする意図もあると考えられるが、いずれにせよ、同性への性指向を

持つ男性がゲイであることや、彼らがいずれゲイアイデンティティを持つことを前提としている。

しかし、同性への性指向を持つ男性がゲイではなく、性指向は異なるが普通の男性としてのアイデンティティを持つことや、異性愛社会に抵抗するばかりでない生き方など、それぞれの選択肢があってもいいのではないかと考えられる。

4 全体を通じての考察

本論では、同性への性指向を持つ男性という視点から、同じカテゴリーという前提を外し、伝えられる側の同性への性指向を持つ男性のより詳細な情報を集め、ゲイとして伝える側との乖離を明らかにすることで、当事者理解を試みた。

同性への性指向を持つ男性がゲイと表象されていても、それはゲイコミュニティやゲイアイデンティティに裏打ちされたゲイという概念によってカテゴリー化されているのではないことが分かってきた。それよりもむしろ、海外より入ってきたゲイという用語によって表象されているのであって、ゲイという本来の概念が日本で根付いているわけではなく、そこに伝える側と伝えられる側の乖離が生まれると考えられる。

アメリカのブルース・パワーは、同じ「ゲイとは何か」というフレーズで次のように書いている。

多くの異性愛者は、同性愛を同性愛者の中で最も無責任でセックスに夢中な人々と同一視する傾向があったのである。そのイメージは、ゲイバッシングをする人たちに弾みをつけ、ゲイを謎めいた脅威の他者として広く受け入れられている見方を強化するのに役立ち、自分の同性愛と折り合いをつけようと、「ネイティブ」などの雑誌の写真を面白そうに見つめながら、こう言った若者たちの世代の混乱を悪化させることになった。—中略—、その写真が彼の「ゲイとは何か」という概念を形成しているのではないかと不安で仕方がない (Bawer, 1993: pp. 19-20)。

ブルース・パワーは、少数派によって作り出されるゲイのイメージがゲイの生き方すべてではないとし、ゲイ概念の混乱を問題にしている。ここでは、ゲイという用語は明確に異性愛社会と一線を画す概念としての意味で用いられているが、日本ではゲイという用語はメジャーな言葉として同性愛との併記や互換的に用いられるなど、異性愛との分けとけというよりもむしろ同性への性指向を持つ男性を表す用語として便宜的に用いられている印象も拭ききれない。

いずれにしても、ゲイという表象によって異性愛社会という前提とともに、同性への性指向を持つ男性がゲイという前提が作られ、それが「複雑さ」や「ややこしさ」につながるの

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

ではないかと考えられる。とはいえ、本論は歴史と文献、簡単な聞き取り調査によるものであり、当初予想していた「複雑さ」、「ややこしさ」の詳細は今回の研究では見えてこなかった。今後は、さらに同性への性指向を持つ男性一人一人に焦点を当て、日常生活の中で性指向に関する認識やコミュニティとの関係をインタビューなどで調査することで、よりよい当事者理解につなげたい。

謝辞

本論は、筆者が2022年に対人援助場面において口頭による同性への性指向を持つ男性当事者からの聞き取りや、2023年7月から8月にかけて行ったアンケート調査を参考にしたものである。性指向に関わることは公言しにくく、なかなか協力者がいない中、調査に協力して下さった皆様、深く感謝申し上げます。

また、論文投稿にあたり、指導して下さいました先生方に厚くお礼を申し上げます。

注

- 1) 例えば「岸田首相、性的少数者（LGBTQ）蔑視の発言した秘書官を更迭」（2023年2月5日付、BBC ニュースジャパン）<https://www.bbc.com/japanese/64527653>（2023年8月31日接続）。「LGBTの理解促進へ 自民議員立法めぐる議論続く」（2023年5月11日付、NHK ニュース記事）<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230511/k10014063461000.html>、「同性婚発言 性的マイノリティ支援団体が政府に抗議と要請」（2023年2月6日）<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230206/k10013972271000.html>（2023年8月31日接続）などが報道された。
- 2) ハッテン場とは、男性同性愛者が出会いを求めて集まる場所（河口・風間、2010）であり、有料の施設もあれば、公園などの人目に付きにくい場所などもある。
- 3) 薔薇族は、第二次世界大戦後、初めて商業ベースに乗ったゲイ雑誌である（新ヶ江、2013）。編集長は伊藤文学である。2004年に一旦廃刊となり、33年の歴史に幕を閉じている。
- 4) 富士高校放火事件とは1973年に東京都中野区の富士高等学校が放火された事件で、容疑者の男性がある男性と同性愛関係にあると公表することを理由に自白を強要されたというものである。次に宮崎雑誌万引事件とは1983年、宮崎のビル上の本屋で高校生男子がゲイ雑誌を万引きしたことが見つかり、トイレの窓から転落死したものである。そして、府中青年の家事件とは、1990年に東京都が「青少年の健全な育成に悪い影響を与える」としてLG団体に対し、宿泊施設「府中青年の家」の利用を拒絶したものである。新木場事件は、2000年にハッテン場となっていた新木場の都立夢の島公園でゲイ男性が少年ら6名に殴り殺された事件である。
- 5) この発表は、後に明らかとなる薬害の問題と関わりのあるものである。浅井（2015）によれば、当初、1983年7月に帝京大学医学部の安部英教授の内科で診ていた血友病患者が日本で最初のエイズ患者ではないかという報道が朝日新聞で行われた。しかし、後に明らかとなる血友病患者に対する血液製剤の薬害問題が影を落とし、1985年3月に厚生省エイズ調査検討委員会がアメリカ在住の別の日本人患者をエイズ患者第1号と発表したことにより、帝京大症例は誤報という形となった。

- 6) ゲイ CBO とは地域のゲイ向け商業施設と連携をとり利用者への啓発普及を行っているボランティア団体である。市川誠 (2016) によれば、ゲイバーとの連携率 (連携店舗数 / 把握店舗数) は地域によって異なり、店舗数の多い東京、大阪は 50~67%、東北、東海、中四国、福岡、東海 80%~100% であった。2016 年は、全地域で 1080 店舗中 643 店舗 (59.5%) に CBO の作成した啓発資材を配布していた。
- 7) MSW は男性とセックスする男性であり、性的パートナーが男性のみで、その性別表現が極めて乏しく、自らをゲイと名乗らない男性であり、現代の性教育では、同性間の性行動が必ずしもゲイと名乗らない男性を対象とするために用いられる (Fassinger & Arseneau, 2007)。日本では、90 年代後半以降、医者や疫学研究者の間で頻繁に使用されるようになった (新ヶ江, 2013)。
- 8) 「エイズ予防指針」は、1999 年にエイズ予防法が感染予防法に統合された際、同法第 11 条第 1 項に規定されたものである。規定では「厚生大臣は、感染症のうち、特に総合的に予防のための施策を推進する必要があるものについて、当該感染症にかかる原因の究明、発生の予防及びまん延の防止、医療の提供、研究開発の推進、国際的な連携そのほか当該感染症に応じた予防の総合的な推進を図るための指針を作成し、公表する」としており、その指針として「エイズ予防指針」が定められ、そのなかの個別政策層の中に「同性愛者」が定められた (新ヶ江, 2013)。
- 9) 東京レズビアン&ゲイ・パレードは、1994 年 8 月に初めて実施された。これ以外にも、日本各地で性的少数者 (およびその支援者) によるパレードの開催が増えている (崎濱, 2017)。1997 年以降、東京でのパレードは中止となったが、2000 年に復活した。東京レインボー祭りは、2000 年に始まり、新宿 2 丁目振興会が主催者となり、振興会に加入している店舗がグループ単位で飲食物を提供する屋台を出店し、ドラッグクィーンなどのパフォーマーがパフォーマンスを演じ、2000 年以降、基本形態は変わっていない (砂川, 2015)。いずれも、多くの当事者が集まる場所であり、研究者による当事者研究の場となることもよくある。
- 10) SSA は、定期的または単発的に同性愛行動を行うが、同性愛であるということを認識していない男性 (同性魅力主義者) とされている (Fassinger & Arseneau, 2007)。

引用文献

- Adam, B. (1995). *The rise of a gay and lesbian movement*. Twayne Publishers.
- Aldrich, R. (2006). *Gay life and culture – A world history*. 田中英史・田口孝夫 (訳) (2009). 同性愛の歴史. 東洋書林.
- Altman, D. (1971). *Homosexual: Oppression and Liberation*, Jeffrey Weeks. 岡島克樹・河口和也・風間孝 (訳) (2010). *ゲイ・アイデンティティ 抑圧と解放*. 岩波書店.
- Altman, D. (2013). *The end of the homodexual?*. University of Queensland press.
- 浅井文和 (2015). エイズ報道を改めて問う. 論座, <https://webronza.asahi.com/science/articles/2015122900001.html> (2023 年 3 月 1 日接続).
- Bawer, B. (1993). *Place at the table, The gay individual in american society*. TOUCHSTONE.
- 別府芳雄・杉本英重 (1959). 性欲錯倒症 (sexual inversion) の一例. 日医大誌, 26 (9), 100-103.

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

- Bernstein, M. (2005). Identity politics. *Annual Review of Sociology*, 31, 47-74.
- Bray, A. (1982). *Homosexuality in Renaissance England*. 田口孝夫・山本雅男 (訳) (2013). *同性愛の社会史 イギリス・ルネッサンス*. 彩流社.
- Cruikshank, M. (1992). *The gay and lesbian liberation movement*. Routledge.
- Draganowski, L. M. (2003). *Unlocking the closet door. The coming out process of gay male adolescents*. UMI.
- Epstein, S. (1996). *Impure science. Aids, activism and the politics of knowledge*. University of California press.
- Fassinger, R. E., & Arseneau, J. R. (2007). "I'd rather get wet than be under that umbrella": Differentiating the experiences and identities of lesbian, gay, bisexual, and transgender people. *Handbook of counseling and psychotherapy with Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Clients*, second edition, pp. 19-49.
- Foucault, M. (1976). *La volonte de savoir*. 渡辺守章 (訳) (1986). *性の歴史 I 知への意志*. 新潮社.
- 布施邦之 (1959). 神経症症状を伴った同性愛の症例. *精神医学*, 1 (8), 557-562.
- 伏見憲明 (2004). *ゲイという経験 (増補版)*. ポット出版.
- 古川誠 (1993). 恋愛と性欲の第3帝国 通俗的性欲学の時代. *現代思想*, 21 (7), 110-127.
- 羽太鋭治 (1921). *變態性慾の研究*. 學藝書院.
- Haldeman, D. (2007). *The village people: Identity and development in the Gay Male community*. *Handbook of counseling and psychotherapy with Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Clients*, second edition, pp. 70-89.
- Halkitis, P. N. (2014). *The aids generation, Stories of survival and resilience*. Oxford university press.
- 林隆 (2017). 男性同性愛者のカミングアウトに関する質的検討. *北海道心理学*, 39, 82.
- 日高庸晴 (2008). MSM (Men who have Sex with Men) の HIV 感染リスク行動の心理・社会的要因に関する行動疫学的研究. *日本エイズ学会誌*, 10 (3), 175-183.
- 平田俊明 (2013). 中年期・老年期の MSM の心理社会的課題. *日本エイズ学会誌*, 15 (2), 78-84.
- 市川誠一 (2003). MSM (Men who have sex with man) における HIV 感染予防介入プロジェクト MASH 大阪について一. *日本エイズ学会誌*, 5 (3), 174-181.
- 市川誠一 (2007). わが国の男性同性間の HIV 感染対策について—ゲイ NGO の活動を中心に—. *日本エイズ学会誌*, 9 (1), 23-29.
- 市川誠一 (2016). 厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業 (総合研究報告書) 男性同性間の HIV 感染予防対策とその介入効果の評価に関する研究 CBO の予防啓発活動と商業施設および自治体との連携に関する研究. 厚生労働省, https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/2016/162121/201618003B_upload/201618003B0004.pdf (2023年9月10日接続).
- いけだまこと (2014). *ゲイ性愛辞典*. 一粒書房.
- 伊野真一 (1997). *Queer Studies の射程*. *クィア・スタディーズ '97*. 七つ森書館, pp. 106-119.
- 石原真衣・下地フローレンス吉孝 (2022). 討議 インターセクショナルな「ノイズ」を鳴らすために. *現代思想*, 50 (5), 8-23.

- 石丸徑一郎 (2022). LGBTQ+ の生きづらさとメンタルヘルスの諸課題. 精神医学, 64 (8), 1069-1073.
- 岩淵紘一 (2021). 多様性と対話. 青弓社.
- 金田智之 (2003). 「抵抗」のあとに何か来るのか?—フーコー以降のセクシャリティ研究に向けて—. 年報社会学論集 16, 126-137.
- 加藤慶 (2015). アメリカにおける男性同性愛高齢者の特徴と社会サービスと提供に関する研究. 明治学院大学大学院社会福祉学, 39, 33-36.
- 川英友 (2013). 「自らを語り得ぬ人々」からの「当事者概念」の考察. 静岡英和大学紀要, 1 (11), 85-94.
- 風間孝 (2010). コミュニティと語りの経験—ゲイコミュニティの事例から—. 解放社会学研究, 24, 10-13.
- 風間孝・河口和也 (2010). 同性愛と異性愛. 岩波新書.
- 黒岩裕市 (2005). 「男色」と「変態性欲」の間—「悪魔の弟子」と「孤島の鬼」における男性同性愛の表象—. 一橋論叢, 134 (3), 374-392.
- 前川直哉 (2010). 大正期における男性「同性愛」概念の受容過程—雑誌「変態性欲」の読者投稿から—. 解放社会学研究, 24, 14-34.
- 宮腰辰男 (2012). セクシャルマイノリティを生きるということ—同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス—. 大正大学出版カウンセリング研究所紀要, 35, 63-77.
- 森山至貴 (2012). 「ゲイコミュニティ」の社会学. 勁草書房.
- Murray, S. (1996). American gay. University of Chicago Press.
- 西村愛 (2012). 社会福祉分野における当事者主体概念を検証する. 大原社会問題研究所雑誌, 645, 30-42.
- 鬼塚哲郎 (2004). ゲイコミュニティへの予防介入事業, その現状と課題. 日本エイズ学会誌, 6 (3), 141-144.
- Pflugfelder, G.M. (2012). The nation-state, the age/gender system, and the reconstitution of erotic desire in nineteenth-century Japan. The journal of Asian Study, 71 (4), 963-974.
- 崎濱奏子 (2017). 日本における性的少数者によるプライドパレードの意義と展望—東京レインボープライドを事例として—. 人文地理学会一般研究発表, 68-69.
- 三部倫子 (2010). かぞくに何を求めるのか—血縁家族, 選び取る家族, ゲイコミュニティ. 解放社会学研究, 24, 14-34.
- 新ヶ江章友 (2013). 日本の「ゲイ」とエイズ コミュニティ・国家・アイデンティティ. 青弓社.
- Slide, A. (2015). Gay's the world. Being a brief history of the secret language of homosexuality. Bear Manor Bare.
- 杉山貴士 (2012). 「無縁社会」と同性愛者—同性愛者の置かれる社会生活環境への一考察—. 大阪千代田短期大学紀要, 41, 113-136.
- 砂川秀樹 (2015). 新宿二丁目の文化人類学—ゲイ・コミュニティから都市をまなざす—. 太郎次郎社エディタス.
- 竹内瑞穂 (2007). 近代社会の〈逸脱者〉たち—大正期日本の雑誌投稿からみる男性同性愛者の主体化—. Gender and sexuality: Journal of center for gender studies, 3, 77-93.
- 玉城寿樹 (2021). 同性愛男性の身体. 人文×社会, 1 (4), 55-77.

「ゲイとは何か？」伝える側と伝えられる側の乖離

- 田中将司 (2017). 日本におけるレズビアン, ゲイ, バイセクシュアル当事者のセクシュアルアイデンティティに関する心理学研究の課題. 九州大学総合臨床心理研究, 9, 205-216.
- 田中みどり・今城周造 (2021). 性的マイノリティの自己受容とカミングアウトの関連性の検討. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 23, 59-74.
- 田中理香子・西山薫 (2022). 性的指向及び性的指向によるマイノリティ・ストレスが精神的健康に及ぼす影響. 北海道心理学研究, 44, 32.
- 海野弘 (2005). ホモセクシュアルの世界史. 理想社.
- Vincent, K.・風間孝・河口和也 (1997). ゲイ・スタディーズ. 青土社.
- Weston, K. (1991). Families we choose. Lesbians, Gays, Kinship. Columbia university press.
- 山中康裕・成田善弘 (1992). 心理臨床大辞典. 培風館, pp. 910-911.

表1 日常生活意識アンケート

1. 自分に最も当てはまるものを選ぶとしたら？ <input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> ゲイ <input type="checkbox"/> バイ <input type="checkbox"/> トランス <input type="checkbox"/> クエア <input type="checkbox"/> そのほか _____
2. 年齢 <input type="checkbox"/> 10代 <input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代 <input type="checkbox"/> 60代 <input type="checkbox"/> 70代 <input type="checkbox"/> 80代 <input type="checkbox"/> 90代
3. お住いの地域 <input type="checkbox"/> 都区内 <input type="checkbox"/> 都区内以外の首都圏 <input type="checkbox"/> 地方 <input type="checkbox"/> 海外 <input type="checkbox"/> その他 _____
4. 自分は性的マイノリティだと思う？ <input type="checkbox"/> 思う <input type="checkbox"/> 思わない <input type="checkbox"/> 思うこともある <input type="checkbox"/> 全く関係ない <input type="checkbox"/> その他 _____
5. ゲイコミュニティに対するイメージは？ <input type="checkbox"/> 良い <input type="checkbox"/> 悪い <input type="checkbox"/> なんとも思わない <input type="checkbox"/> 自分と同じ <input type="checkbox"/> 自分に近い <input type="checkbox"/> 自分と異なる <input type="checkbox"/> その他 _____
6. コミュニティへのツールは？（複数回答可） <input type="checkbox"/> ネット掲示板 <input type="checkbox"/> SNS <input type="checkbox"/> バー飲み屋など <input type="checkbox"/> 発展場 <input type="checkbox"/> 書籍など <input type="checkbox"/> 場所に関わらず会うこと <input type="checkbox"/> その他 _____
7. 自分にとっていま最も関心のあることは？ <input type="checkbox"/> 仕事 <input type="checkbox"/> 自分の趣味や夢 <input type="checkbox"/> パートナー探しまたはパートナーとの楽しみ <input type="checkbox"/> 同性への性指向を持つ人と仲間作り交流 <input type="checkbox"/> 異性への性指向を持つ人と仲間作り交流 <input type="checkbox"/> セックス <input type="checkbox"/> その他 _____
8. 同じ性指向を持つ人たちのコミュニティを利用する理由は？ <input type="checkbox"/> パートナー探し <input type="checkbox"/> 仲間作りや交流 <input type="checkbox"/> セックス目的 <input type="checkbox"/> 情報収集 <input type="checkbox"/> 退屈しのぎ <input type="checkbox"/> 異業種の人との出会い <input type="checkbox"/> 生活に欠かせない <input type="checkbox"/> その他 _____
9. コミュニティと関わる頻度 <input type="checkbox"/> ほとんどない <input type="checkbox"/> たまにある <input type="checkbox"/> しばしば <input type="checkbox"/> 毎日何回か <input type="checkbox"/> 毎日断続的に <input type="checkbox"/> 終日 <input type="checkbox"/> その他 _____

10. 日常生活で最も大切にしていることは
パートナーとの関係や時間 親兄弟姉妹など親族との関係 仕事関係
同性への性指向を持つ人たちとの付き合い 異性への性指向を持つ人たちとの付き合い
その他 _____
11. いま一番望む生活形態は？
同性婚 同棲生活 パートナーがいても別居 仲間がいればよい 一人がいい
12. 将来一番気がかりなことは
仕事のこと 老後 パートナーの介護 親兄弟姉妹の介護 お金
その他 _____
13. 自分にとってコミュニティとの関わりの中で得られたことやそこでの経験などがあればお聞かせ下さい。
14. カミングアウトは？
自分の中にとどめている コミュニティの中にとどめている 親兄弟姉妹にした
性指向の異なる友達にした 公言している その他 _____
15. 今後の社会に望むこと
多様性は認められる社会の実現 同性婚制度や戸籍制度の改革
パートナーシップ制度の拡充 性指向にこだわらない社会的雰囲気
今のままでよい その他 _____